

令和 3 年 6 月 1 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04292

研究課題名(和文)多職種協働のためのリフレクティング・プログラムに関する実践研究

研究課題名(英文)A practical study on the Reflecting program for inter-professional work

研究代表者

矢原 隆行(yahara, takayuki)

熊本大学・大学院人文社会科学研究部(法)・教授

研究者番号：60333267

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文):本研究は、多職種協働を促進するための画期的方法として「リフレクティング」を用いたプログラムの実践研究をおこなうことを目的として実施した。まず、多職種協働とリフレクティングに関する国内外の先行研究を収集し、文献研究をおこなうとともに、国内外の研究者・実践者のネットワークを駆使して直接的な情報収集をおこなった。また、参加型アクションリサーチを通じたリフレクティングの有効性の検証をおこなうため、熊本県内の医療法人の研究協力のもと、以下の研究に取り組んだ。(1)リフレクティング研修実施と研修プログラムの改善、(2)職種間・部署間の連携実態調査、(3)個人と組織のウェルビーイングに関する調査。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、多職種協働を促進するためのリフレクティング・プログラムについて、これまでのリフレクティング研究の内外の蓄積を基盤に独自の研修プログラムの構築、および、その実質を損なわないためのアクションリサーチという継続的実践研究モデルを創出したことである。

また、その社会的意義として、研修プログラムとアクションリサーチ自体により、協働した医療法人の多職種協働を促進したのみならず、他の医療・福祉組織においても実用的に導入・応用可能なプログラムを提示した。

研究成果の概要(英文):The purpose of this study is to conduct a practical research on a program using "Reflecting" as an innovative method to promote multi-professional collaboration. First, we collected previous studies on multidisciplinary collaboration and "Reflecting" in Japan and abroad, and conducted a literature study as well as direct information gathering through a network of researchers and practitioners in Japan and abroad. In addition, in order to verify the effectiveness of "Reflecting" through participatory action research, we conducted the following research with the cooperation of a medical corporation in Kumamoto Prefecture. We conducted the following studies with the cooperation of a medical corporation in Kumamoto Prefecture: (1) implementation of "Reflecting" training program and improvement of it, (2) investigation of the actual state of cooperation between professions and departments, and (3) investigation of the wellbeing of individuals and organizations.

研究分野：社会福祉学

キーワード：リフレクティング 多職種協働 アクションリサーチ 臨床社会学 リフレクティング・トーク リフレクティング・プロセス 制度分析 ディスコミュニケーション

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 幅広い対人援助の領域において「連携」「協働」「チーム」の重要性が強調されて久しい。多様化、複雑化が進む現代社会で生じる諸問題に対応しつつ、地域における包括的ケアを実現していくうえで、一専門職、一機関のみで効果的な取り組みをおこなうことは困難であり、さまざまな専門性を有した専門職、さまざまな専門機関、さまざまな専門領域が連携、協働していく必要があることは明らかである。しかし、その一方で、多様な福祉・医療の実践の現場において、実質的に有効な「協働」のための具体的方策については、まだまだ知識や技術の蓄積が不足していると言わざるを得ない。とりわけ、多職種間の協働については、それぞれの専門性に関する相互理解が難しいことが指摘されており、各職種に固有の歴史や人間観、専門的知識の内容の差異、さらには、福祉や医療の制度とその歴史を通して積み重ねられてきた専門職間のパワーバランスやヒエラルキーをめぐる根の深い問題が存在していることを直視する必要がある。こうした現状を踏まえるとき、具体的な多職種協働のプログラムを構築することは、我が国の福祉実践において急務である。

(2) こうした状況に対し、研究代表者が継続的にその有効性を研究し、実践を重ねてきたのが、ノルウェーの臨床家であったトム・アンデルセンによって提唱された「リフレクティング・プロセス」という画期的なコミュニケーション・デザインである。この方法のエッセンスは、異なるコミュニケーション・システム（複数のチーム）間のヘテラルキカルな会話の仕組みにある。すでに世界各地の対人援助領域で活用が試みられているこの方法について、国内では、未だその研究はきわめて限定的な範囲でしかなされていない。研究代表者は、理論的かつ実践的に国内におけるリフレクティング・プロセス研究を推進しており、これまで多領域の研究者、実践者と学際的研究会を組織し、この方法の理論的吟味と応用可能性の探究を牽引してきた。また、2011～2013年度、科研費 23530797（研究代表者：矢原隆行）では、高齢者福祉施設内の職種間連携、精神保健福祉領域の機関間連携に焦点をおいた今回申請する研究のパイロット的位置づけの研究を実施。2014～2016年度、科研費 26380819（研究代表者：矢原隆行）では、さらに多様な領域で本技法の有効性について検討・整理・情報発信するとともに、本技法の研究・実践に関する先進的地域である北欧にて現地視察をと研究交流を行い、ネットワークを構築してきた。

## 2. 研究の目的

### (1) 長期的な参加型アクションリサーチによる多職種協働プログラムの有効性の検証

本研究では、その前半部分において、国内外の多職種協働に有用な研究成果を整理する。そのうえで、その知見を踏まえながら、多職種を含む組織において、多職種協働促進のためのリフレクティング・プログラムを実施するとともに、当該プログラムの有効性を現場の職員から成る研究チームとともに検証する参加型アクションリサーチを遂行する。

### (2) 多職種協働プログラムの評価とアクションリサーチのフィールド拡大

本研究では、その後半部分において、アクションリサーチの成果について詳細な分析をおこなう。また、その結果を踏まえて改善・再構築した多職種協働促進のためのリフレクティング・プログラム改訂版を拡大して並行実施する。その際、前半のアクションリサーチにおいて組織した現場の職員から成る研究チームも拡大し、共同研究チームによる参加型アクションリサーチを遂行する。

## 3. 研究の方法

(1) 多職種協働とリフレクティングに関する国内外の先行研究を幅広く収集し、その文献研究をおこなう。

(2) -1. 多職種協働促進のためのリフレクティング・プログラムとアクションリサーチの手順について、共同研究に取り組む現場（多職種が働く熊本県内の医療法人）の専門職との協働により計画立案をおこなう。

(2) -2. 多職種協働のためのリフレクティング・プログラムを実践しつつ、継続的に組織の実情を把握するため、当該組織の全職員を対象とした連携実態調査をおこなうとともに、協働のためのリフレクティング・トークの研修や実践を行い、それらの有効性について各種方法を用いた把握と、得られたデータの組織全体での情報共有を進める。

(2) -3. 上記の実践研究を通して、多職種協働促進のためのリフレクティング・プログラム改訂を重ねる。

#### 4. 研究成果

##### (1) 文献研究の成果

・「開かれゆく会話のためのリフレクティング：二つの事例から」『精神療法』(2017)  
 リフレクティングの体現者であるトム・アンデルセンらによるリフレクティング・トークの事例を紹介するとともに、そこでリフレクティングとして何がなされているのかについて検討した。それを通して、会話が開かれゆくためにリフレクティングがなす働きの核心部分が、常にその会話の文脈を問い直し、開かれゆく会話がそこに於いてあるような場を実現していくことにこそあることを確認した。

・「ダイアログのオープンさをめぐるリフレクティング」『現代思想』(2017)

リフレクティングを主要な方法として用いることで内外の注目を集めるオープンダイアログについて、リフレクティングの観点からそのオープンさに関し、仮説的見取り図を素描するとともに、多様なダイアログ実践に通底する「間」と「場」の創出を中軸とした新たなコミュニケーションのパースペクティブについて検討した。

・「つぎつぎになりゆく出来事と対話的であること—Tom Andersen を手がかりに」『臨床心理学』(2018)

「科学的」心理学を含む近代科学に見られる要素還元主義的機械論に依拠した世界観に対する根本的批判で知られるジョン・ショッターが、その抽象的議論の実際の臨床現場において体現されるひとつのあり方として、参照するアンデルセンの面接場面における種々の会話の意味について、ショッターの観点をを用いて検討した。

・「ディスコミュニケーションの場をひらく：多職種連携のためのリフレクティング」『対話がひらく ころの多職種連携』(2018)

同じ利用者にかかわって、共通の目標に向けた活動を行っているように見える際にも、多様な専門職種のそれぞれには、固有の自明な世界 (world-taken-for-granted) が存することにより、「ディスコミュニケーション」と呼ぶべき事態が生じることについて、どのように捉え、どのようにそれと取り組むことが可能か検討した。

##### (2) 参加型アクションリサーチの成果

###### ・連携実態調査

共同研究に取り組む熊本県内の医療法人において、職員間・部署間の連携の在り方を明らかにするため、2018年より毎年、全職員対象の自記式質問紙調査を実施した。回収率は例年8割、200件を超える。質問紙は全14ページで、法人内における12の職種と18部署における連携の量と質について、「仕事上の関わりがどの程度あるか」、「仕事上の関わりは全体的にどの程度うまくいっているか」を、それぞれ「1. 全くない」から「5. よくある」、「1. とても悪い」から「5. とても良い」の5件法で尋ねた。

以下に、2018年、2019年の調査結果において、各職種における連携の質の自己評価得点（破線）と全体評価得点（実線）について結果をレーダーチャートにしたもの（Figure 1）、および、各職種における自己評価得点と全体評価得点との差を横軸に、各職種の全体評価得点を縦軸に表した散布図（Figure 2）を示す。

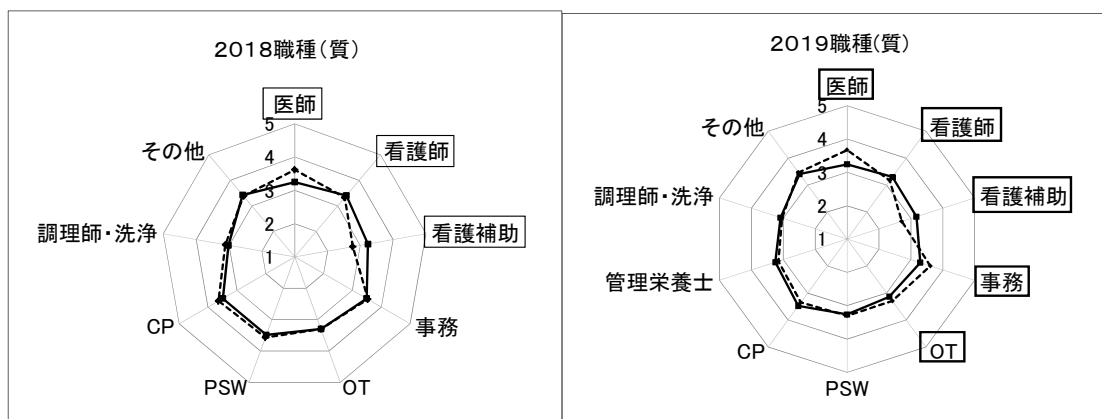


Figure 1. 各職種の全体評価得点と自己評価得点の差 (連携の質)

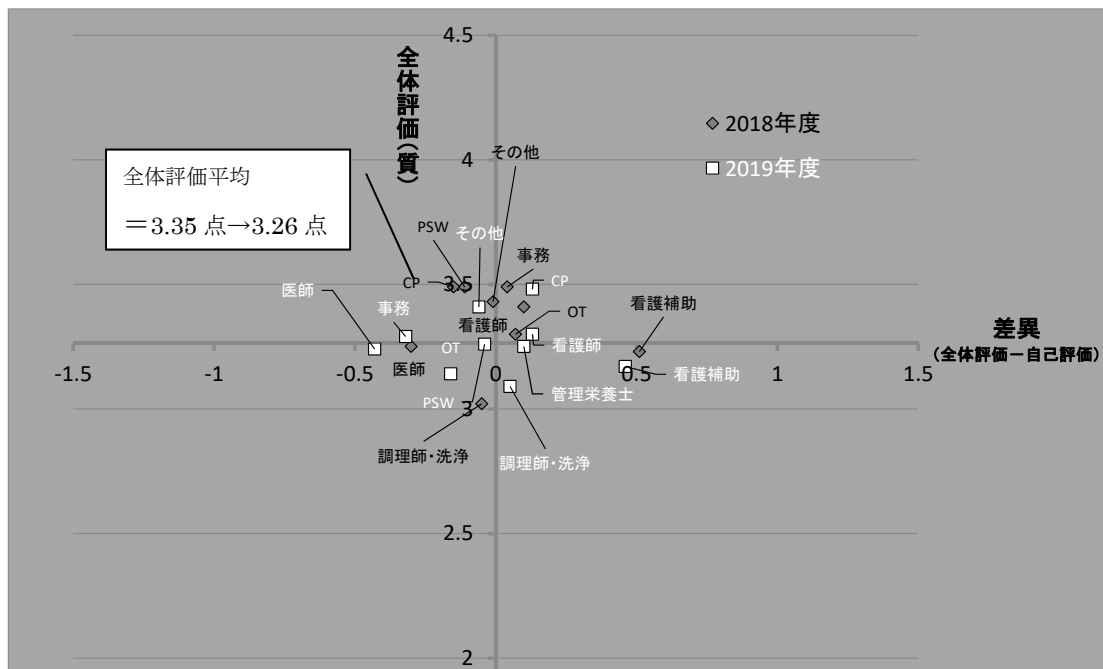


Figure 2. 各職種の連携の質に関する全体評価得点と自己評価得点との差異

本調査の結果からは、職種間の連携の質をめぐる認識自体の職種間におけるズレ（ディスコミュニケーション）が存在することが確認された。また、そのズレの方向は、職種間のヒエラルキーを反映している様子も観察できた。すなわち、(1) 職種間の認識には連携の現状をめぐる明確なズレが生じており、それは基準器間の齟齬と考えられるが、(2) 職場におけるヒエラルキー上位者が自らの基準に照らしてそうしたディスコミュニケーション事態を認めない場合、職種間の不均衡な力関係のもと、職種間の対話というメタコミュニケーションの回路は閉ざされ、(3) ズレは言挙げされることなく隠蔽され続ける可能性があることが推察された。

・リフレクションシート

2018年から3ヶ月に1回、法人に所属する全職員を対象にWEBでのアンケート調査を実施。職員における充実感や幸福感（ウェルビーイング）、職場での連携のあり方への評価、組織の雰囲気等について10点満点で質問、自由記述での現状への意見も収集。

リフレクションシートの結果は、法人における各部署の役職者の集まる会議でフィードバックし、各部署内での振り返りの機会を持つとともに、個別の対応が求められる場合には、リフレクティング・トークの機会を設定。

・リフレクティング研修

リフレクティングを多職種連携、臨床実践等様々な場面で導入・活用するため、上記の各種調査を含むリフレクティング研究プロジェクトと並行して、2018年より一期二年のリフレクティング研修（各期メンバーは法人内から20名程度、法人外から5名程度）を実施。当該研修を経た職員が、法人内の多職種連携や法人外の機関との多機関連携におけるリフレクティング・トークのファシリテーターを担えるようにトレーニングを行っている。2020年度末で二期生までの修了者を輩出。研修プログラム自体も、継続的に改訂を重ねている。

・院内協働促進室

本研究プロジェクトにおける各種調査を通して確認された職員間・部署間・職種間において連携が十分に機能していない状況に対応するため、2020年初めに法人内に治療環境ケア部門を創設し、組織内のコミュニケーションをケアする院内協働促進室を設置。相談者や関係者のニーズに合わせて臨機応変にリフレクティング・トークを含む会話の場を開催。

(3) 本研究全体の成果

本研究においては、(1)における文献研究および北欧における先進的实践に直接学びながら、熊本県内の医療法人における参加型アクションリサーチを通して、多職種協働のためのリフレクティング・プログラムを計画・実施・評価・改訂を重ね、更新を継続することができた。この参加型アクションリサーチのモデルは、多職種協働に取り組む多様な現場で応用可能である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 矢原隆行	4. 巻 101(7)
2. 論文標題 ダイアログとリフレクティング	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 治療	6. 最初と最後の頁 828-832
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢原隆行	4. 巻 70(7)
2. 論文標題 面接等におけるリフレクティングの活用	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 更生保護	6. 最初と最後の頁 13-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢原隆行	4. 巻 15(1)
2. 論文標題 リフレクティングと司法精神医学：文脈に新鮮な風を通すためのやわらかな道具	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 司法精神医学	6. 最初と最後の頁 55-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢原隆行	4. 巻 18
2. 論文標題 つぎつぎになりゆく出来事と対話的であること Tom Andersenを手がかりに	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 371-375
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢原隆行	4. 巻 10
2. 論文標題 北欧の刑務所におけるリフレクティング・トークの展開	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 更生保護学研究	6. 最初と最後の頁 19-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢原隆行	4. 巻 43(3)
2. 論文標題 開かれゆく会話のためのリフレクティング：二つの事例から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 精神療法	6. 最初と最後の頁 59-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢原隆行	4. 巻 45(15)
2. 論文標題 ダイアローグのオープンさをめぐるリフレクティング	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 138-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 7件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 矢原隆行
2. 発表標題 二人のナラティブを聞いてのリフレクティング・トーク
3. 学会等名 日本家族療法学会第36回北海道大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢原隆行
2. 発表標題 対象者中心の医療及び支援におけるリフレクティングの可能性
3. 学会等名 第15回医療観察法関連職種研修会 シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢原隆行
2. 発表標題 リフレクティングと司法精神医学：リフレクティングの概略と司法領域における可能性
3. 学会等名 第15回日本司法精神医学会大会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢原隆行
2. 発表標題 リフレクティング：会話についての会話という方法
3. 学会等名 日本精神保健看護学会 教育活動委員会主催研修会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢原隆行
2. 発表標題 Wagner, J. の刑務所実践におけるリフレクティング・トークとリフレクティング・プロセス
3. 学会等名 日本犯罪社会学会第45回大会 テーマセッション
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 矢原隆行
2. 発表標題 Wagner, J. の 'Dialogues' と刑務所実践
3. 学会等名 日本家族療法学会第35回ぐんま大会、自主シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 矢原隆行
2. 発表標題 ダイアログのオープンさをめぐるリフレクティング
3. 学会等名 第34回日本家族研究・家族療法学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 矢原隆行
2. 発表標題 医療・福祉分野における多職種連携とリフレクティング
3. 学会等名 第1回 広島医療社会科学研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 矢原隆行
2. 発表標題 医療・司法領域におけるダイアログとリフレクティングの可能性：北欧における実践の現状を踏まえて
3. 学会等名 第12回通院医療等研究会（招待講演）
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 矢原隆行
2. 発表標題 多職種連携のためのリフレクティング：きく、はなす、うつす
3. 学会等名 日本医療社会福祉学会2017年度セミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 山登敬之編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 160
3. 書名 対話がひらく こころの多職種連携	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関